

インテリアと心理的空間*

— 色, 物, 部屋について考える —

Interior decoration and space

— Some psychological considerations of color,
object and room —

井原成男**
Nario Ihara

はじめに

— 最近若者たちの間でインテリアがとてものはやっております、我々の育った時代からみると、とても想像できないような、こったインテリアがなされています。部屋の中に観葉植物をおいたり、部屋のかべを自分の好きな色に統一したり、床に、こった木材が使われたりしています。面白い例では部屋の中に、デパートにおいてある、洋服をつるすための洋服かけをもちこんで使っている子もいるんですね。そしてそこに自分の服をつるしたり、友人をよんでその服をつるしたりするんだそうです。こんな小物もインテリアの中でよく使われています。

これは子どもたちが部屋を飾れる財力をもつにいたったという経済力を背景にしてなりたっている現象だと思うのですがどうでしょうか？我々はこの現象をどうとらえていけばいいんでしょうか？井原さんにはこういった現象を心理学的立場から考えて話していただきたいと思うのですが。

井原：ぼく自身は部屋のインテリアにあんまり関心がないのでなんともいえないんですね。でも、部屋を飾るというのはそうとうなエネルギーを必要とするんじゃないですか？今思いだす一つのケースがあります。このケースの子は今、高2なんです、中2の頃からかわっている子です。最初相談にみえられたとき、もっとも困っていたのは

下痢だったんですね。ところが身体の方をいくら探っていても何の原因もでてこない。いわゆる心身症っていうやつです。この子がいつか川を流れてきたサーフィンボードをひろいまして、弟といっしょにみがきあげて、それで部屋に飾ってるんです。最初の頃は飾っているだけでした。この子はなかなかエネルギーの旺盛な子で、夜、フィールドアスレチックの公園に行って身体をきたえるようになりますが、昼間は学校へもいかず閉じこもっていました。最後はこのとじこもりが高じまして、食事もとらなくなった。夜中に一人こっそりとでてきて自分で作ってたべているんです。

ぼくが面白いと思うのは、下痢という非常に幼児的な表現しかできなかった子が、とじこもって巣づくりするかのようにインテリアを飾りはじめた。サーフィンボードもその一つです。その時期にものすごいエネルギーがでてきているところなんです。とじこもっているようにみえて、ものすごくエネルギーを使っているんじゃないか？そう思うんですね。

この子はこの巣づくりの時期が終ると、今まで通っていた学校をさっさとやめ、自らの意志で夜間高校を受験しなします。そしてそこで知り合った子と今度は実際にサーフィンをしにでかけていきます。つまり、外にでていくわけですね。こういうプロセスをみていると、自分だけの部屋を飾りつくっていくというのは、自分の世界をつくって

* 本稿はNHK教育T.V. YOU : 気分はアート ぼくたちのインテリア。1985年10月12日PM10:30~11:30 (再放送10月19日PM2:00~3:00総合T.V.) の出演準備のために、棚谷克己ディレクターと持った話し合いを再構成したものである。インテリアと室内空間という、筆者にとっては比較的なじみの薄いテーマについて、いろいろ考える機会を与えてくださった棚谷ディレクターに感謝したい。なおこの番組の共演者は日比野克彦、児島未散、中尾ミエ、木村恒久、北村信彦、瀬戸山和樹の各氏であった。筆者にとっては未知との遭遇ともいえるべき異質の世界との出会いであり、とてもたのしい1時間であった。

** 東京慈恵会医科大学小児科 (〒105 港区西新橋3-25-8) (長野大学)

いくという心のプロセスと何か対応するものがあるんじゃないかと思うんですね。

自分の空間を自分らしく飾るというのはとても健康な行為なんじゃないかというのがぼくのコネです。

— そうですね？ 実は私は部屋をちらかしっぱなしでして、まったく飾らない。外にでている方が仕事はかかりますので、部屋にはあまり目を向けません。こういうのは一つの病理なんじゃないか？

井原：いえ、そうは思いません。部屋の中はちらかしっぱなしで外にも目が向かないというのは病気でしょうが、外に目がむいて、家の中を片づけるヒマがないというのは最も健康なことだと思います。

少しまとめてみます。自分の身のまわりに関心がなく、葛藤が身体化され、身体症状になってしまっているのが最も不健康、外には目が向かないが自分の身のまわりや、自分の巣を飾ろうとするのは関心は狭いがかなり健康、外に積極的にでいくために部屋の中に関心がないのはとても健康、そして外ともよくつきあうし、部屋の中もきちんと飾られている、これはウルトラ健康ということになると思います。

ただこれはあくまで心理的にみたスケールです。

— 私はもともとドキュメントが専門でして、沖縄支局にいた頃はドキュメント作りの仕事をしていました。沖縄では、街で話しかけると、よく答えてくれていたんですが、東京ではダメですね。この前六本木で話しかけてなぐられてしまいました。みんなが部屋の中にとじこもって、せっせとインテリアにこっている。それは私なんかにとっては社会の病理の表現のようにも思えます。

井原：そういう面はあると思います。ぼくが20歳の頃。ということは今から15年前ですが、その頃は、寺山修司の「書をすてて街へでよう」という本がはやっていました。つまり、外の方が面白かったのです。しかし、今ではもう外が面白くなくなりました。特に東京の町は管理しつくされている。だから、部屋の中にくるんでしょうね。しかし、その部屋の中は本当に自由に個性的な空間になっているんでしょうか？

— 私が東急ハンズにいったインテリアのコー

ナーできてきたところでは、その反対のようですね。店員さんに、どんな風にインテリアをしたいかと相談し、まかせてしまうことが多くなってきているそうです。店員さんは、もっと自分のスケールで自由に選択してほしいとなげいていました。自分の自由になる部屋のはずなのに、それも、一応の基準に合っていないと不安なんですね。また、はやっている小物は1ヶ月回転でかわっているということでした。これはインテリア情報誌が月刊ででていることによるものということでした。つまり、自分の個性でえらんでいるわけではないようなんですね。

井原：どうやら街だけではなく、我が内なる空間、部屋まで管理されはじめているわけですね。

ぼくの知っている人で学生時代とてもアナーキーな人がいましたが、その人の部屋はタバコの灰で足の踏み場ありませんでした。きっと内なる空間、部屋もアナーキーだったというわけなんじゃないか？

少しまとめてみますと、その人の内なる空間である部屋をみると、その人がどういう人なのかが分かる。つまり、部屋はその人の人となり、パーソナリティの表現の一つだとみることはいかなるのでしょうか？

また、もう一つ深めてみますと、こういうこともいえると思います。部屋は現代にあっては外と内のせめぎあいの場所なのではないか、と。内なる力は葛藤が身体化（心身症化）されることをこばんで、自分なりの表現を部屋に与えようとしめす。ところが、外からの力（状況）は内なるもの、部屋までも管理し、没個性化しようとしているのではないか？ こんな風に考えてみると、部屋の問題はすぐれて1つの状況論になりうると思うのです。^{注1)}

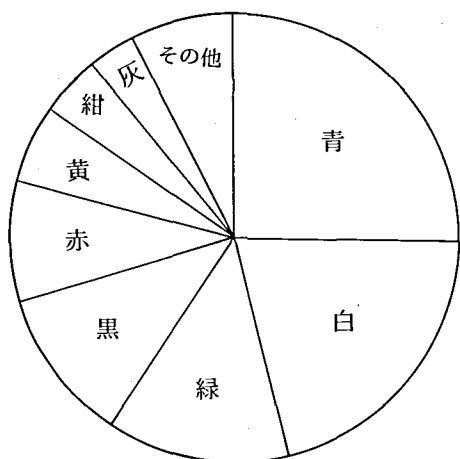
1. 色と人間

— こんどYOUの中で紹介しようとしている部屋の中に、色を主体にした部屋がでてきます。それはピンクの部屋、白い部屋、緑の部屋です。それからとてもセンスがいいなと思う部屋で黒と赤をとともうまく使ってあるものがありました。

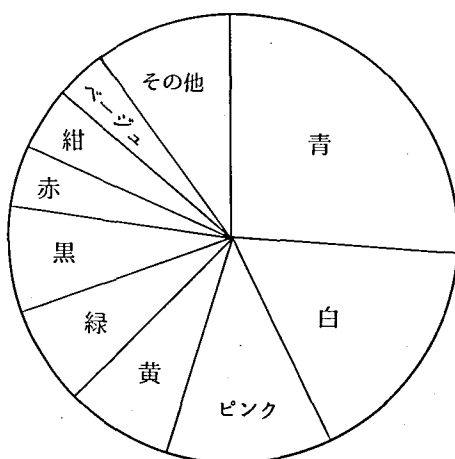
部屋にとって色がどんな意味をもつのか考える

前に、井原さんがやられた色の好き嫌いのアンケートについて聞かしていただけたらと思います。

井原：この図をみて下さい（図1，2）。これは、ぼくが非常勤で教えにっている長野大学の

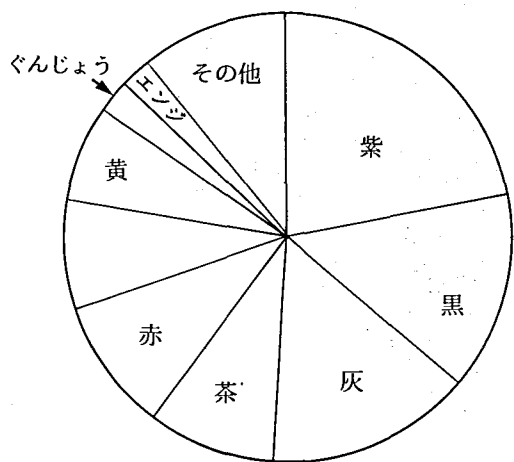


男

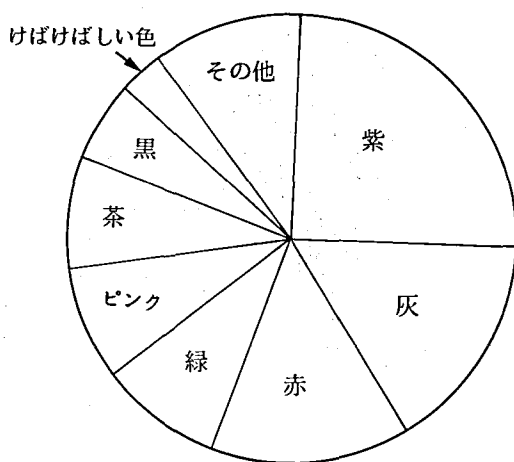


女

図1 好きな色（男・女）



男



女

図2 嫌いな色（男・女）

学生155名にきいた、色のアンケートです。男性99人、女性56人です。好きな色と嫌いな色、それに理由をきいてみました。

まず好きな色からみてみましょう。^{注2)} 男性、女性ともに1位と2位は青と白です。理由としてあげられていたのは青が空のイメージと結びつけて、すがすがしく、落ちついた世界を感じさせるというものでした。また、白は清潔で、どの色とも調和し、どんな風にも変えることができるという理由などがあげられていました。青と白という

のはタバコのハイライトの色でもあります。

3位は男女でちがっていきまして、男性では緑、女性ではピンクなんです。この2つの色は嫌いな方の色としてもけっこうでていました。緑は好かれる理由としては、平和で落ちつくし、自然を連想させるというものなのですが、嫌いな理由としては、うっとうしいとか切迫感があるとかいうものがあげられています。人工的な緑は嫌だということもありました。確かに、室内におかれた植物の緑や観葉植物なんかは、とくに夜になるとなにか、こう気味が悪いという実感はあります。何

か、そこに生き物がひそんでいるという感じで
気味が悪いのではないかと思います。植物で思い
だしたんですが、センダックの「かいじゅうたち
のいるところ」という絵本の中に、部屋の中が植
物だらけになってしまうという発想があります。

— それはどういう絵本なのか少し説明しても
らえないでしょうか？

井原：この絵本なんですが、マックスという少
年が、あんまりいたずらが激しいので、お母さん
に叱られて、「もうゴハンは食べさせません！」
と部屋に閉じ込められてしまうんですね。そうし
ますと、部屋の中に木がはえ、やがて森になっ
てしまいます。マックスは旅にでて1年が過ぎます。
そこで出会った怪獣たちをやっつけて、マックス

は王様になって君臨しているわけです。しかし、
そこでスープのにおいをかぎ、家が恋しくなって、
「いかないでくれ！」と頼む怪獣たちをふりきっ
て、1年かけて元の部屋に帰ってくるわけです。
すると、そこに、ちゃんと母親の用意してくれた
スープがおいてあって、それはまだあったかかっ
たとかいてあります。このまだあったかかったと
いうところが、このストーリーのミソでして、彼
が2年と思っていたイメージの時間は、まだスー
プがさめないそんな短時間だったわけです。外か
らみていると、ただゆうことをきかない子が、部
屋に閉じ込められたという事件に過ぎないのだす
が、子どもの心の中では、こんなにも天駆けるよ
うな空想の世界が展開していたわけなんですね。

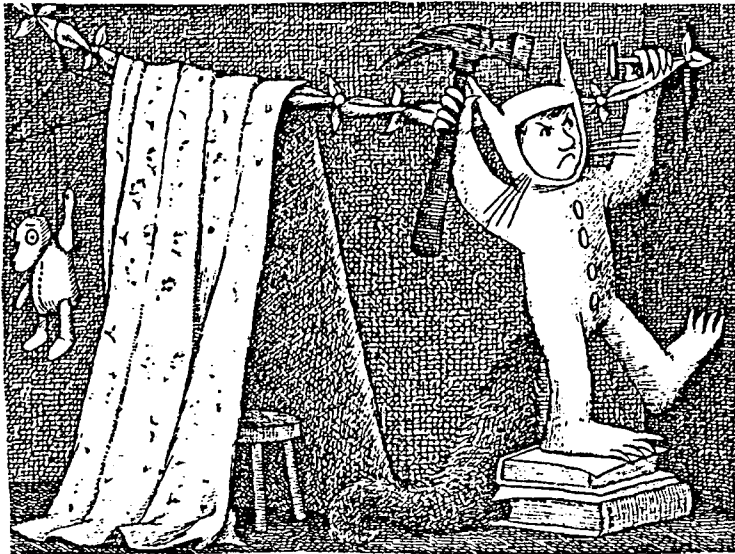


図3 かいじゅうたちのいるところ：センダック

— いや！これはとてもすばらしい絵本ですね。
感心してしまいました。そういえば、今度VTR
で紹介したいと思っている男の子で、部屋中、観
葉植物でうめつくして、まるでジャングルみ
たいにしているという子がいるんですが、この絵
本を見てまして、その子のことを思いだしてし
まりました。

井原：緑が嫌いと言った人の中に、切迫感をあ
げた人の気持ち、ぼくはとてもよく分かります。
緑の中にはなにか生々しい野性がありますね。

— 色の好悪の話をもう少し続けていただけな

いでしょうか？

井原：女性で3位に好きな色としてピンクがあ
げられています。これは女性だけが選んでいる色
でして、男性には一人もいません。ピンクとい
うのは女の子的なイメージのたいへんに強い色だ
と思います。赤ん坊の色、幼ない色、なんでしょ
うね。ところで女の子の中にもこの色を嫌っている
人がいるんです。理由は、下品で、イライラして、
落ちつかないというんですね。つまり、ピンクと
いうのはブリッ子の色なんだと思います。面白い
ことに、男の子でピンクを嫌いな色としてとりあ

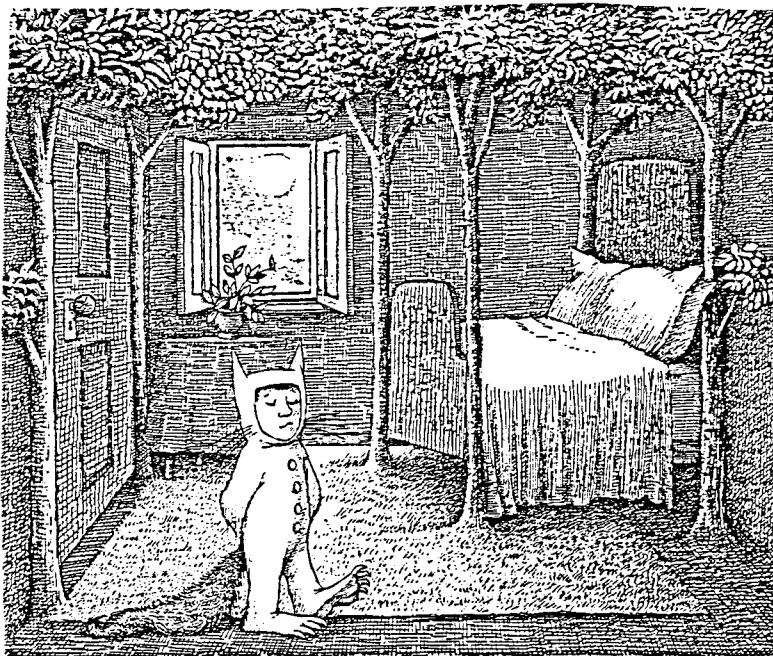


図4 かいじゅうたちのいるところ：センダック



図5 かいじゅうたちのいるところ：センダック

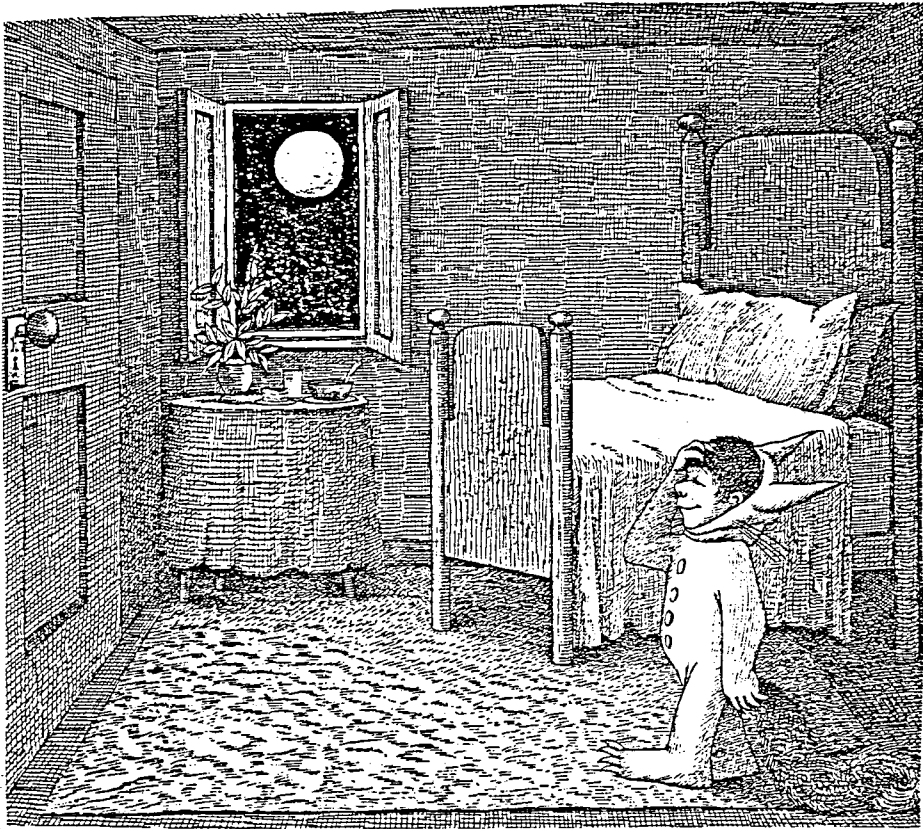


図6 かいじゅうたちのいるところ：センダック

げ、「ピンクが嫌いだ」という女の子にもてなくなると思うけど、かんべんして欲しい色だ」といっている人がいました。棚谷さんなんかどうですか？

— 私も、あとで紹介しますピンク色の子の部屋に行きまして、これはとても入れない世界だと思いました。しかし、いざ中に入ってみると、とてもホンワカとした気持ちが出て、恋をしたくなってしまうしました。

井原：もう、いくつかでましたが、今度は嫌いな色の方の話に入ってみます。まず、男女ともに圧倒的に嫌われているのは紫です。紫が好きだと答えた人は全体の中でも一人しかいませんでした。^{注3)}理由としては、俗っぽい、けばけばしい、くどい、落ちつかない、きついなどがあげられていました。また、2位には男性で黒、女性で赤があげられていました。黒はくらさや絶望を連想させ、赤は派手すぎておちつかないという理由があげられてい

ました。この2色は好きな方にも、強い、おちつく、神秘的（黒）、情熱的、活動的、あたたかい（赤）などの理由であげられている色でもあり、とても個性の強い色なのだと思います。したがって、こういった色を使うと、うまくいけば、とても個性的になるが、失敗するとみっともなくなってしまう。個性の強さというのはそんなものではないかと思います。

今回の調査は、ばく然と、好きな色・嫌いな色ときいたのみです。服につかうとしてとか、部屋のかべの色としてときけばまたもう少しちがった、そして、それ故に、もう少し限定された結果がでてくると思います。

— 色の好き嫌いから分かるさまざまなことについてはこれぐらいにしまして、今度番組の中で使用する予定の、色を主体にした部屋のVTRについて少し感想を聞かせてもらえないでしょうか？

井原：どうぞ。話して下さい。

— 3つの事例について紹介します。ピンクと、白と、緑です。まずピンクの部屋の少女の話題からいきます。彼女は女2人姉妹なんです。お父さんは亡くなったので現在は母親と女3人で住んでいます。以前はブルーの部屋だったんですが、母親は、色の好みはかわっていく、ピンクなんていう女の子らしい色を使えるのは今だけだからということで、ピンクに変えてあげたんだそうです。

井原：ブルーからピンクへですか。お父さんが亡くなった、その雰囲気や少しでも明かるくしようとしているんでしょうか？ピンクというのはやはり少女の色ですね。悪くするとぶりっ子の色になってしまう。そのあたりが、嫌う人も多いという理由なんでしょうね。

— 今、ぶりっ子という話がでましたけれど、この子の部屋には、松田聖子のポスターが貼ってありました。また、この3人は野球が好きで、しかも、それは高校野球だけなんです。金魚をかっていまして、一匹一匹野球選手の名前がつけてあるということです。

井原：高校野球というわけがれなき、純粋なものという連想が思いうかびます。やはり、けがれない少女時代、そういうものへの志向性が、この家を形づくっている土台としてあるのではないのでしょうか？

— なるほど。じゃあ、次は白い部屋にすんでいる高校生の女の子です。この家は外も中もみんな白なんです。白というのはお父さんの好きな色でして、お父さんはやっと念願のマイホームを建てたんですね。この子は着ているセーターも白でした。ゴチャゴチャしているのは嫌いということで、ポスターなども貼ってありませんでした。でも、これから少しずつ自分なりのポイントや白に付けていきたいといっています。

井原：白を好きな理由として、①何色にも染っていないということと②何色にも変えていけるという理由があげられていました。この家をたてたのが、父親というところが、ぼくは大変面白いと思いました。この子はきっと、父親のことをよくきく、「いい子」なのでしょう。父親色である白にすなおに従っているわけです。ユング派の用語を使わしていただくと、「父の娘」ということになると思います。しかし、そこから独立し、自

立していくために、自分なりの色を見つけ、自分なりのポイントや是非をつくっていった欲しいと思います。^{註4)}

— 次は緑の部屋です。この部屋の住人は、実は若者ではなく、30代後半のおばさんなんです。この人は、部屋のカベを緑の森林風になっているのみではなく、電話カバー、テーブル、椅子、スリッパにいたるまで全て緑なんです。果ては、自分の着ている服まで緑なんです。この人は高校の先生をしていまして、教え子の男の子と結婚したんだそうです。

井原：変わった人なんです。まさに緑のおばさんなんです。緑のおばさんが、子どもたちを交通事故から守る安全の象徴であるように、緑は安全を意味すると思います。緑のおばさんとその夫である年下のダンナさんはこの安全さの中で、お互いに憩いを感じつつ暮しているんでしょうか？しかし、緑一色というのは、こってりとしていてこっているなという感じがしますし、一種独特のなまなましさを感じます。コンクリートジャングルの中に、青々とした緑があったら、そこだけもののすぐく生々しくなってしまうのではないのでしょうか？中年女性のもつあまりにも生々しい、色気とも通じるものがあるかもしれません。

— 最後にもう一つつけ加えたいのは、赤と黒の部屋です。この子の部屋は、木の床、白のカベなんです。インテリアが黒、ウインドウが赤なんです。今回見してもらった部屋の中ではもっともセンスのよい部屋でした。ただ、この子自身は少し太っていて、あまり印象に強くのこらない子でした。男の子にはあまりもてないかもしれません。

井原：センスは一等賞というところなんですよ。先ほど色の好みのところでもいいましたように、黒とか赤というのは大変個性の強い色なんです。ですから、そういう組み合わせをつかってしかも嫌な感じになってないということは恐らくとてもセンスがいいんでしょう。芸術家としては最も成功するタイプでしょう。きっと個性も強い人なんだと思います。

— お話をうかがっていて、多少決めつけているようなところもありましたが、成程、色というのはなかなかその人の心の状態やパーソナリティ

をよく表わすものなのだなということが分ったような気がいたします。

井原：最後にもう一言つけ加えますと、部屋はその人のプライバシーの場所、いわば秘密の場所、自由な場所であるわけですから、自分の好きなようにやっていいんだと思います。基準なんていうものはなくていいんじゃないですか？その中まで人に相談してあなたまかせというのはひどくつまらないことのように思えます。ただ、自室にも人を招くことがあるわけですから、人にみせるものであるという部分もあることは否認しません。部屋もある種の基準に合わせようというのは、人とあまりにも違った個性をもつのは怖いという現代人の特徴なのかもしれません。

2. 物と人間

— 今回の企画では、部屋の中においてある小物を一点、「私の一品」と称して持参してもらおうと思っています。小物も大事なインテリアの一部であるというわけです。今度、井原さんと共演する写真家の瀬戸山和樹さんは、女性とその部屋をテーマにしてずっと撮り続けている人なんです。彼がいうには、女性がひっこして、そのたびにいらないものはすてて、まるで脱皮するかのやうにとびたっていくのに、その中にいつまでも大事にもち続けている一品があるというんですね。そういう風にずっと変らない物こそが真の「私の一品」になるのではないかと思うのですが。

井原：どんな例がありますか？事例をあげて下さい。

— 例えばリカちゃん人形だとか、お守りだとか、ビールの空カンだとか、ぬいぐるみもけっこうありますね。英語の辞書をもってくるという人もいます。

井原：物と人間との間にある関係は、大切さということではいうならば、なじみのあるなしにかかわってくるところが大きいと思うのです。なじみのあるものは、何か人を安心させる作用があると思います。今言われた例でいいますと、リカちゃん人形だとか、ぬいぐるみというのは、その子の手あかや臭いのしみついた大切な物なのだと思います。英語の辞書というのもそうでしょう。これ

も使いこんでいればいるだけ、手アカがしみこみます。私の知人で、英語の辞書をめくると、その肌ざわりに心が落ちつくという人がいました。今から15年以上前、まだ大学受験の頃の話ですけど、この人にとって、辞書はまさに大学に通してくれるお守りにまでなっていたんだと思います。そういえば先ほどの例の中に、お守りそのものというものもありましたね。どんなお守りですか？

— 氷川神社のお守りで、大学受験用だそうです。

井原：多分、今お話しした辞書と同じ意味でしょうね。

— ところで井原さんがもってきて下さる、一品は何ですか？

井原：石です。

— えっ。石。どんなのですか？

井原：これです（図7）。

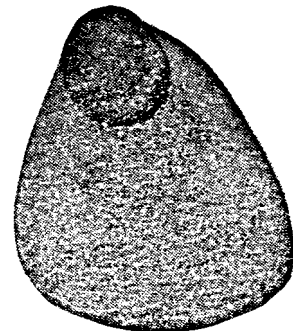


図7 石：筆者が小6の頃指宿海岸にてひろったもの

— 面白い形をしていますね。山にも見えるし、靴のようにも見えますね。

井原：これは小学校6年生の時、ぼくの生れ育った鹿児島県の指宿というところの海岸で見つけたものです。仏様に飾って長いこと、もう拾ったことさえ忘れていました。ところが、ぼくが婚約者を連れて親にみせに田舎に帰ったとき、田舎でみたアルバムの中に、この石をみつめて海岸に立っている小6のぼくの姿があったわけです。それを見て彼女は、「石をみつめる内向的な少年だったのね」といいました。そのときぼくは、はっと思っ

たのです。あっ！ぼくはこのとき自分の内面と対話していたのだと。石が自己（self）の象徴であるとユング心理学の人たちが考えているということは、後年知ったことでした。

今、棚谷さんは靴のようにも見えとおっしゃいましたが、まさに靴をはいて歩きだそうとしていたのかも知れません。

石といえば、ぼくのみていた子が、心の病（てんかんの精神運動発作）から立ち直っていくプロセスの中で、父親と石をひろいに山にでかけるようになったことがあります。この子もまさに、大いなる自然と大いなる自己（self）（＝石）に出会おうとしていたような気がしてなりません。ケルンというのがありますね。小石を1つずつ、積みあげて最後に塔になっていく。人間は基本的に何かをつくっていくものかもしれません。ぼくの家の子4ヶ月になる女の子も、積木が大好きで、ツミキツミキと大騒ぎします。人間にはつくるといふ衝動があるのかもしれません。それが自己（self）をもつくりあげようという志向性として現れるのかも知れません。^{注5)}

— 井原さんはこの石を今も家に飾っていらっしゃるのですか？

井原：いえ、これは、棚谷さんと話していて、実家から黒ネコヤマトの宅急便で送ってもらったものです。用が済んだらまた送り返そうと思っています。これは実家の仏様のところにあげてある石なんです。ぼくが結婚するまで、この仏様のところでぼくのお袋は陰膳をあげていたんだそうです。これは小さいハチに家を離れている人の無事をいのって膳（ごはん）をもるといふものです。つまり、ぼくはこの石をそこにおいておきたいのです。ぼくにとって物とはそういうものだと思います。物、大切な物はもう心の中にあり、心の中の一部としてあるのです。そういう姿が理想だと思います。

— 井原さんは物から離れていくことが心の成長であると考えているわけですか？

井原：そういえると思いますし、物から離れていても安心してられる、つまり物が完全に心の内に内面化されていて、いつでも取り出せるようになっている、これが最高だと思います。心は一生持ち運びできる非常にコンパクトになった入れ

ものだと思うのです。

— 青年たちの心について考えるときにもその考えは有効ですか？

井原：有効だと思います。

— それでは今度は物に焦点をあてて、インテリアを見ていきたいと思います。最初にVTRで紹介したいと思うのは部屋の中にカウンターバーをつくってしまった20歳の青年の例です。一人ぐらしの専門学校生です。8畳ほどの部屋を改造して、カウンターバーをつくったんです。まわりには低い椅子が置いてあります。また、窓枠が貼りつけてあるんですね。そして、窓のむこうにはポスターがあって、ニューヨーク・マンハッタンの夜景と新宿の夜景があるんです。

彼はまた、ここで部屋を暗くして友人と飲むんですね。フスマの上のカモイのところですか？あそこにはガードレールがつけてあって、高速道路が走っている。そこにはミニカーが置いてあるんですね。そして部屋にはモデルガンがおいえます。

井原：ずいぶん色んな小物が置いてあるんですね。その部屋で、彼と同じぐらいの年齢の男どもが集って暗やみの中で酒をのんでいる図を想像しますと、男の子がまだ、男になりきれず、くすぶっているという実感が湧いてきました。高速道路、車、ガン、みんな男性的なもの、力強いものの象徴ですよ。そういうものにあこがれているんでしょう。カウンター・バーも西部の荒らくれ男を連想してしまいます。

しかし、そこにあるのはモデル（にせもの）のガンであり、ミニ（小さな）車であるわけです。窓の外にはマンハッタンが広がっていますが、彼ら自身はにせものバーの部屋の中であぐましているのです。こういう連想全てが、大人の男になろうとして成り切れずにいる青年たちの真剣さと、こっけいさ両方を象徴しているようにぼくには思われます。

それと同時に、こういったプライベートな部屋の中で酒をくみかわし、ロールプレイとしての大人の男を演じることで、来るべき外の世界での実践に向けて、リハーサルが行なわれているとみることもできると思うのです。ここには幼児に見ら

れる「ごっこ遊び」の再来をみることもできると
思います。部屋はまさにそういった積極的な意味
ももっていると思うのです。

——次にやはり小物が大活躍している部屋なん
ですが、女子大生の部屋でロフト風というんです
か？舟の客室風になっている部屋に住んでいる子
がいます。この子はアパートに住んでいまして、
部屋の中に中2階のごときスペースもあるわけ
です。この子は部屋のカベに自分の作ったパネルを
はめこんでいます。スタイリストを目指していま
して、この子自身置き物になりそうなかawaii子
です。自分をオサムちゃんと男名で呼び、竹の子
族風の服をきています（この人が録画当日着て
きた服は共演者の北村信彦さんのデザインしたも
のであった。北村さんは小泉今日子：キョンキョ
ンの服もデザインしたんだそうである）。この子
は坂本竜一と竹中直人がすきだということで、自
分でも竹中直人の真似をしてくれました。

井原：大変はではでしい女の子なんですね。そ
こまで部屋にこっているということはそういった
方面の専門家をめざしているためでしょうか？部
屋自体が、スタイリストになるための勉強の場、
練習の場ともなっていると思います。竹中直人っ
ていうのは、笑った顔をしながら怒ってみせたり、
怒った顔をしながら泣いたりという自我分裂した
ような芸をやる人ですよ。（はい）ああいう芸
の真似ができるということは、そうとう自分をつ
きはなしてみないとできないことだと思うのです。
自分のことを男名でよぶといったって、本人は生
理的に女性なわけですから、そうとう突き放さな
いとオサムちゃんはつらぬけないと思うんですね。
棚谷さんはこの子自身置き物といわれたけど、自
分そのものも客体化されて置き物になってしまっ
たんじゃないですか？

——そうです。この子は自分の服を部屋の連続
体として考えていて、部屋と連続した置き物にし
ようとしています。

井原：まさに、恐るべき世代ですね。くるもの
がきたという感じだなあ。カタログ世代ここに極
まれりといったところですね。

ぼくが面白いと思うのは、自分を男性化すると
いっても、ゴリラのような男をめざすわけではな
いということです。坂本竜一という中性的な男性

にあこがれるというところが面白いですね。モノ
セックスなんですね。こういう子は自分を状況、
つまり外にすっかり合わせてしまい、客体化して
しまったという点で、プライバシーのない、ある
意味では病人、健康すぎる病人といえるのではな
いかと思います。冒頭のところで、インテリアに
こるなんていうのは世紀末的で病理の表現じゃな
いかと棚谷さんがいわれたけれど、世紀末の病氣
というのはこうした「健康すぎる病」として現れ
ているんじゃないでしょうか？自分でも言ってる
ことがよく分んないともありますけれど（笑）。

——もっとすごい人がいるんですよ。次に紹介
したいと思っているのは、やはり大学生の男の子
なんですが、部屋の中に自転車をつりさげている
んですね。

井原：本当ですか？！

——それから靴を並べてインテリアにしていま
す。きわめつけはハンモックにズボンを並べてい
るんです。これらはすべて実際に使っているもの
なんですね。

井原：なんだ。それじゃインテリアじゃなくて、
外で使うものを家の中に整理しているだけじゃな
いですか？不精なんですね。

——この子には自己主張がありまして、アメリ
カ人は外で使うものを家の中に持ち込むじゃない
か。ぼくはそういう生活をしたい。外を内へだとい
うんですね。

井原：理屈の方はいまいちピンと来ませんけれ
ど、今までみた3人の中では最も健康な人ってい
う感じがしますね。外で遊んで帰ってきて、家は
ただのねぐら、そういった生活が学生にとっては
最も健康な生活だと思いませんか？ぼくはこの人
はいちばん好きになれそうですね。

また、この人の自己主張とやらの中に、今どう
してインテリアなのかということの答えがあるよ
うに思います。つまり外（街）を内（インテリア）
にもちこんでしまったんでしょうね。

——共演する写真家の木村恒久さんは街にでて
も面白いことがないから内（インテリア）にはげ
むんだけれど、しかしその内だって没個性で管理
されつくしているといっています。

井原：しかし、そうした状況下にあっても、人
間ってというのはたくましいんですね。いろんなも

のをつくってしまうんですね。そんな気がして圧倒されてしまいます。

3. 部屋と人間

— ここまでインテリアについて、色や小物との関連からいろいろ考えてきました。ところでこのインテリアの入れ物、容器である部屋というのは人間にとって一体何なのでしょう？ そのあたりのことについてこれから考えてみたいと思います。

井原：部屋論ということですね。

— 私は今回の企画を立てましたときに、はじめのうち考えていたことは、スタジオ内に3つ部屋を用意しまして、代表的な3人の人を選び、その人たちに1時間の間にインテリアをしてもらおうと考えていました。そして、できあがったものについて、様々な立場から論評を加えていただこうと、こう思っていたのです。インテリアにつかうものについては東急ハンズの方で全面的に協力するという約束をとりつけてありました。

井原：即席でつくったものを評価するというのはとても面白いと同時になかなか大変ですね。

— 箱庭療法というのがありますね。あれは心理療法の中ではどんな風に位置づけられているのでしょうか？

井原：芸術療法のひとつとみていいと思います。ただ、理論的な枠組としてはユング心理学の考え方がそのバックボーンをなしています。ここにできあがった作品をひとつもってきました。この絵がそうです。(図8、9) これはぼくの友人の三沢英夫くんが、患者さんのつくった作品をもとにして、絵にしたものです。

ところで、YOUのスタジオにきた人に自由に部屋のインテリアをつくってもらおうとすれば、それは、「箱部屋療法」とでも名づけられたいと思います。けっこう面白い企画ですね。^{注6)} ぼくは、もともと、人間がインテリアするということの中には治療的な意味があるんだと思います。というよりも人間にとって、何事かを表現するということとはとても健康な行為だと思います。例えば心身症の子どもたちというのは、表現がとても下手な子たちだと思うんですね。表現が下手だから、身

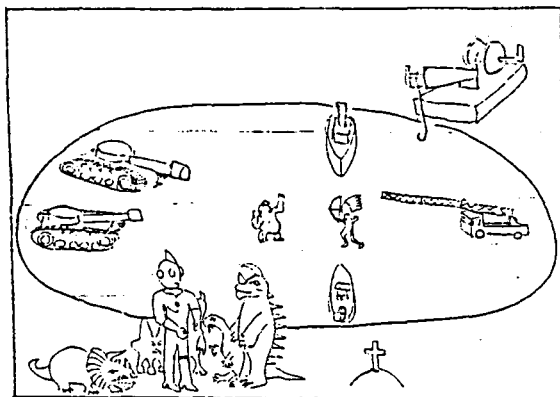


図8 箱庭療法の一例：三沢英夫による

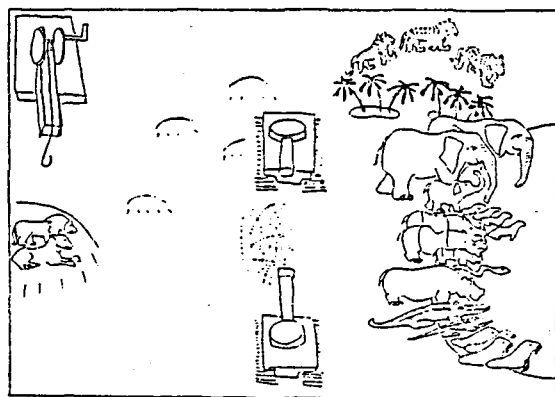


図9 箱庭療法の一例：三沢英夫による

体にでしてしまうと思うんです。ぼくは、人間というのはどうしても表現してしまう存在であると思います。表現の仕方が分からなかったり、抑圧していたりすると、身体にだしてしまうんだ、そんなイメージをもっています。

— 井原さんは部屋のイメージをどんな風にとらえているんですか？

井原：以前、子どもが生まれるとき、ぼくの妻が妊娠中に知人の木村涼子さんから、赤ちゃんが

生まれるまでのプロセスを、子宮を部屋にたとえて描いた本をもらったことがあります。子宮といういごちのいい部屋にすみついた赤ん坊がすくすく育ち、部屋がきゅうくつになって外にでてくる。それが出生であるというイラストでした。この考え方をヒントに少し考えてみたいと思います。

そうすると、この子宮といういごちのよい部屋に入りきれなくなった人間が自分の大きさに合わせて作っていくのが、部屋だということになると思うんですね。この部屋は最初、母親と同居の部屋ですが、だんだん自分自身のプライベートな部屋をほしがります。そして家をで、下宿して、結婚し、新しい部屋の集合体としての家（家族）をつくるわけです。この家をつくった人、父と母はやがて、子どもが独立して家をでると老いぼれ最後はカンオケ、あるいはお墓という終のすみかに入るのではないかと。そして宇宙という部屋の中にとびたつわけです。

つまり、人は母の部屋から生まれ、母なる大地に戻っていくわけです。

——ずい分莫大な考え方ですね。是非放送でその話をして下さい。

井原：ぼくは一時期、古墳にとってもこったことがあります。人はなぜこんな大きな墓をつくったんだろうと。しかし、古墳は墓というより、死後の部屋なのだと考えるとその謎はとけるような気がします。高松塚古墳などに描かれている壁画を見ますと、あれはもう宇宙なんですね。ちっぽけな墓にとじこめられるのではなく、死んで宇宙の中に復活し、すみつくのだと考えると、あんなにも大きな墓（＝部屋）をつくった意味が分かるような気がするのです。

そして、ぼくはもう一つの妄想をもっています。それは古墳の中に、朱塗りの石棺があったという記事（朝日新聞、昭和60年9月26日朝刊）から連想した事なんです、古墳の石室は子宮の中、つまり赤い部屋なのではないかということです。妄想もここまでいきますと、前方後円墳が女の人が股をひろげて座っている姿のように見えてくるから不思議です。この図（図10）をみて下さい。そ

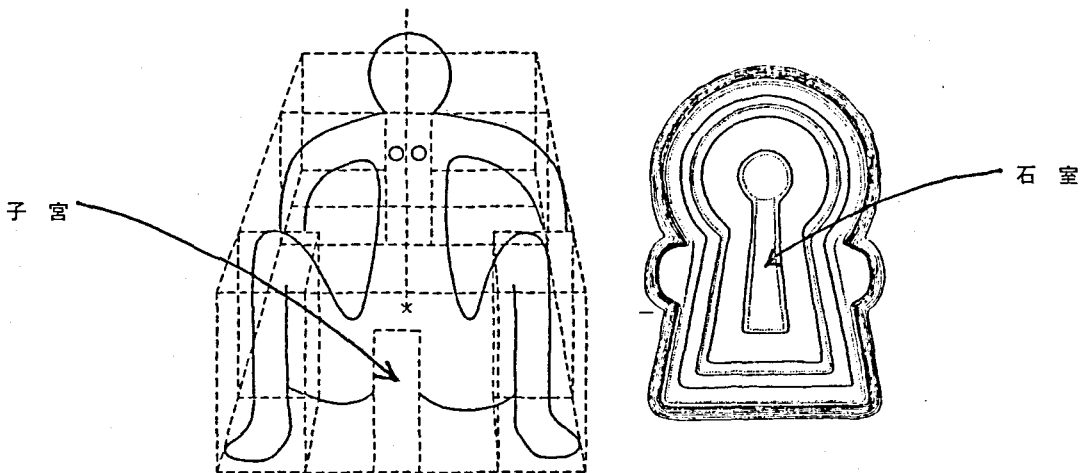


図10 子宮と石室の位置の比較

うすると、石室のある位置が丁度人体でいうならば子宮のある位置だということがよく分かります。こんなへんなことを考えるのはぼくだけかと思っていたら、山口昌男さんは、リオ族の家屋について、それは女性の体そのものを図案化したものなんだという説をたてておられます。次の

ような図があげてあります（図11）。ぼくはこの図をみて、こんな自由な発想をする人がいるのかと嬉しくて夜もねられなかったのをよくおぼえています。

——だんだんついて行けなくなったので、その話はこの辺にして下さい。

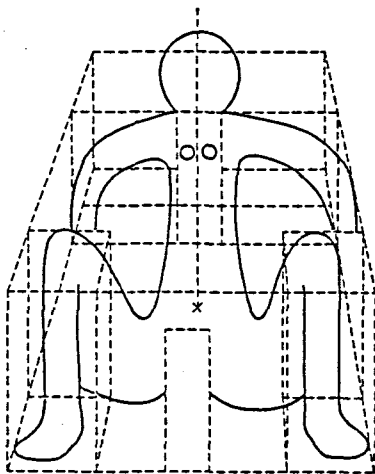


図11 家屋の構造に女性の体を比定した模式図
(縦の点線は家屋の柱、横の点線は梁)
：山口昌男による

井原：はい、分かりました。

—今のお話で、部屋は人間が一生つきあう不思議な容器であることがよく分かりました。ところで、人間はなぜその容器を飾る、つまり、インテリアをほどこすのでしょうか？

井原：動物行動学の中にテリトリーという考え方があります。日本語にしますとちょっとまづい訳ですが、なわばりということになります。例えば犬は自分のテリトリーの中にオシッコをして臭いをつけますね。あれが、インテリアの原初形態ではないかと思うのです。

ぼくはたてたばかりの真新しい部屋に入ると、確かにきれいでいいなと思うものの、同時にものすごく不安になります。それは、そこに自分の臭いがないからだと思います。

例えばひっこしをするとよく分かると思うのですが、そういう部屋に対してやることはカベでもどこでもいい、どこかにさわって、自分の臭いをつけることです。そして、そこに住むことに決め自分の道具を入れます。自分風にインテリアしていくうちに、(つまり、自分風に臭いをつけていくうちに)そこは自分のテリトリーになるのです。

しかし、この部屋をまたひっこしのために去るとき、道具をだし、ゴミをだし、もぬけの殻になった部屋、ガラんとした部屋をみると、そこにもう

自分の臭いはなく、自分のテリトリーではなくなっているのです。

そのような意味で、部屋はまさに自分の一部なのです。

—自分の一部という意味では服にもそういうことがいえませんか？

井原：その通りだと思います。その意味で、部屋のインテリアと服の好みには共通するものがあるかもしれません。2つとも、距離はだいぶちがっていますが、人間の身体の一部であり、人間の心の外化されたものであると思います。もう少し図式化すると人間の心に近い順に＜身体＞→＜服＞→＜インテリア＞と並べて考えることができると思います。

このように考えてきますと、人間が服にこったりインテリアにこったりする限り、(大胆な仮説ですが)人間が心身症になることはないと思います。冒頭にあげた子のことを思いだしてみてください。彼は、下痢という心身症がなくなる頃から服にこり、インテリアに凝りはじめたのです。もう少しいいますと、心身症という即自的な状態の中では、人間は、服とかインテリアといった対象化されたものに心を拡大していけないのだと思うのです。

—井原さんは、人間が本当に自分を表現できれば病気になるかと思っているのではないですか？

井原：その通りです。

おわりに

—井原さんから色の心理ということを引き予定だったのですが、話題が思いがけないところにまで広がりとてもうれしく思っています。今度の出演の人はそれぞれパワーのある人なのでその辺を十分だしてもらえれば、とても面白いものになるのではないかと思います。ただ收拾がつかなくなる恐れはありますけれど。ゲストの人はみなさんととてもオシャレな人ばかりです。中尾ミエさんがそうですし、あの人はとても面白い人です。20歳でもう自分の家をつくったんだそうです。

井原：木村さんというのはどんな人なんですか？

—この人もはっきりした考えをもった人で、街に祭りがなくなった。その代りにインテリアを

やってるんだろうけれど、みんな個性的にやっているとみえて、みんな画一化されている、管理されている。そういう考えのようです。北村さんていうのはまだ22歳の少年でして、まあ一種の天才少年だと思います。

井原：みんなすごい才能をもっているんですね。ぼくなんか写真もイラストもとてもできないし、いわんや服のデザインなんて考えたこともないですからね。

—しかしね。井原さん、私は思うんですけど、インテリアなんかにはなるなんて社会の病理現象だと思うんですよ。そういうことをとりあげて、なんで若者のお守りをしなきゃいかんのかと思うんですけどね。若者なんてのは大人にたたかれて、そこから成長していくものだと思うんですよ。

井原：同感です。しかし、そういうことをぼくはとても番組の中でいう勇氣はありませんね。

—今、ふっと思いついたんですが、私はゲストに藤原新也を呼びたいなあ。

井原：えっ。あの「東京漂流」の藤原さんですか？

—ええ。

井原：藤原さんはぼくも大好きだから是非よんで下さい。

—じゃ、これで、私は家に帰って出演交渉をします（このあと、棚谷さんはタクシーで帰っていった）^{注7)}

注1) 「せめぎあいの場所」として部屋をみる発想から、登校拒否を考えてみるとどのようなことがいえるだろうか？登校拒否児は外（学校）にもいけず、内（両親）からも追いたてられるとき、自室に閉じこもりカギをかける。まだ、それが不可能な場合、トイレや風呂場などに逃げこみ、たてこもる。これはまさに外にも内にも居場所がないことをよく表していると思う。この子どもたちは、固有な領域としての自我をまだ形成していない。したがって固有な領域としての部屋、トイレ、風呂場などを求めるのである。彼らの精神の中に固有な場所としての自我を形づくる努力がなされない限り、治療は単なる適応主義に陥ってしまうであろう。

注2) アンケートの細部について記載しておく。好きな色、嫌いな色について、全体、男、女の順にのべる。男、女のところに、それぞれ、その理由を挙げておいた。被験者は長野大学学生で筆者のカウンセリングの講義を

うけているものである。

好きな色（全体）N=155

青	40
白	33
緑	17
黒	15
赤	12
黄	10
紺	9
ピンク	5
灰	4
カーキ色	2
ベージュ	2
オレンジ	2

（その他、シルバー・メタリック、紫、からし、ペパーミントは各1名であった。）

好きな色（男）N=99

青	25	（清々しい、すみとおった、なごむ、落ちつく、広い）
白	22	（清潔、どの色とも合う、どんな風にも変えられる、落ちつく、何もない状態）
緑	13	（自然：山、木、畑、田舎；平和、落ちつく）
黒	11	（強い、染らない、神秘的、落ちつく、はっきりしている）
赤	9	（活動的、生きている、情熱的、暖かい、しみじみ：夕日）
黄	5	（明かるい、暖かい、落ちつく）
紺	5	（落ちつき、やさしい、日本的）
灰	3	（落ちつく）
カーキ色	2	（丈夫）

（その他、紫：夕暮の色、シルバー・メタリック：しぶい、からし色、オレンジ：落ちつく）

好きな色（女）N=56

青	15	（落ちつく、安心、透き通った、深い、周りに合わせて変わる、母の好きな色）
白	11	（清潔、どんな色にも染められる、きれい）
ピンク	5	（やさしい、女の子らしい、かわいい）
黄	5	（明かるい、暖かい、柔らかい）
緑	4	（やさしい、明かるい、植物的、落ちつく）

黒 4 (高貴, 強い, 落ちつく)
 赤 3
 ベージュ 2 (柔らかい, やさしい)
 (その他, 灰: 落ちつく, オレンジ: 暖かい, ペパー
 ミント: 明かるい)

嫌いな色 (全体) N=155

紫 36
 灰 23
 黒 18
 赤 17
 茶 12
 ピンク 12
 黄 7
 緑 6
 ぐんじょう色 2
 エンジ 2
 なし 2
 (その他, 青, 白, オレンジ, ベージュ, かび色, ど
 ども色, メタリック, にごった色, くすんだ色, くさっ
 た色, はっきりしない色 各1名。)

嫌いな色 (男) N=99

紫 22 (俗っぽい, けばけばしい, 淫乱, く
 どい, 落ち込む, しつこい, きもち悪い)
 黒 15 (暗い, 絶望的, 汚い, 怖い, 人を馬
 鹿にしたような)
 灰 14 (陰気, 絶望的, 虚無的)
 茶 10 (暗い, はっきりしない, じじ臭い,
 うんち色)
 赤 9 (落ちつかない, 血のよう, 怖い, 派
 手)
 ピンク 8 (落ちつかない, 軽薄)
 黄 7 (目立ちすぎる, ケバケバしい, 神経
 を逆なでされる)
 ぐんじょう色 2 (汚れた)
 なし 2
 エンジ 2
 (その他, 青: さめた, 緑, かび色, どども色: 汚い
 ベージュ: ふやけそう, オレンジ, 白: 汚れやすい,
 メタリック系)

嫌いな色 (女) N=56

紫 14 (けばけばしい, 落ちつかない, きつ

い, 暗い, 冷たい)

灰 9 (暗い, 汚い, 中途半端)
 赤 8 (落ちつかない, 派手, 怖い, 強すぎ
 る)
 緑 4 (切迫感, 人工的, うっとうしい)
 茶 4 (落ちつかない, 戦争のイメージ: 中
 原中也より, 汚い)
 ピンク 4 (下品, イライラ, 落ちつかない)
 黒 3 (暗い, 不潔)

けばけばしい色 2
 (その他, オレンジ: 落ちつかない, ベージュ, にごっ
 た色, くすんだ色, くさった色, はっきりしない色,
 なし各1。)

注3) 当日の録画どりの中で, この話題を提供した
 ところ, 紫は今年の流行色だと中尾ミエさんは反論した。
 世の中には明かるい性格が好きなの人もいれば, 暗いのが
 好きな人もいる。それはその人の個性なのであって, 何
 色が好きなの人がいても, いっこうに構わないわけである。
 色の好悪は価値判断とはまったく別次元のことである。
 ただ, 一般に, みんなが嫌う色というのはそれだけに着
 こなしがむずかしく, うまくいけば個性的だが, 一步ま
 ちがえると, とんでもなくダサクになってしまうと思う。

注4) 録画取り当日, 筆者はこの女の子のとなりに
 座った。放送中, 色々話した印象も, 筆者が会う前から
 考えていたものとほとんど同じであった。この女の子は
 大切にしている一品として, かわいらしい2匹の, おっと
 せいを持ってきていた。とても育ちのよいお嬢さんとい
 ういでたちであった。その部屋の特徴(この場合は白)
 ということが, こんなにもその人自身を映しだしてしま
 うものなのかと筆者自身感心してしまった。

注5) 録画取り当日, やはり会場に石をもってきて
 いた高校生がいた。彼は八ヶ岳の頂上でそれを拾ったと
 いう。こんな高校生もまだいたのかと筆者はかつての自
 分に会ったように嬉しくなってしまった。

また, 筆者の石は録画取りの中では紹介されずじまい
 だった。それは, みんなのもってきた小物を使ってスタ
 ジオ内の小部屋をインテリアしようという企画に使われ
 ている最中に, 筆者の出番がまわってきたためである。
 筆者としては紹介できず残念な気もしたが, そんな風に
 使われてこそ, この石の役割はまっとうされるのかもしれ
 ないと思った。物は心の中にあってこそ生きる! ので
 あると。

後日, TVに放映されたものをみていたら, この石は
 他の小物にまざってちゃんと映しだされていた。つまり,
 石はちゃんと出演していたのである。

注6) 残念ながらこの試みは様々な事情で実現しな
 かった。かわりに, みんなのもちよった小物を使って男
 女3人ずつの代表が, それぞれ, 男のインテリア, 女の

インテリアというものをつくったが成功したとはいえない。とても雑然としたものになってしまった。筆者は、もともとインテリアというのは極めてプライベートなものであると思う。それを集団でやろうとしたところに、ちぐはぐさが生じてしまったのだと思う。

注7) 藤原さんはO.K. されなかったのか? 出演されなかった。

参 考 文 献

1. 秋山さと子, 海野弘, 北沢方邦, 桑原茂夫: 色彩の冒険. 福武書店, 1984.
2. アンネ=マリー・ポロウィ(湯川利和, 長沢由美子訳): 子どものための生活空間. 鹿島出版会, 1978.
3. Ardrey, R.: The territorial imperative. Dell Publishing Co.Inc., New York, 1966.
4. ボルノウ, O. F. (大塚恵一, 池川健司, 中村浩平訳): 人間と空間. せりか書房, 1966.
5. 千々岩英彰: 色を心で見る. 福村出版, 1984.
6. 延藤安弘: こんな家に住みたいナ. 晶文社, 1983.
7. 江幡潤: 色名の由来. 東京書籍, 1982.
8. 日高敏隆: 群となわばりの経済学. 岩波書店, 1983.
9. 市橋秀夫: 空間の病い. 海鳴社, 1984.
10. 市川浩, 山口昌男(編): 身体論とパフォーマンス(別冊 国文学). 学燈社, 1985.
11. 井原成男: Personal space の発達の研究(1). 教心第17回総会論文集: 114-115, 1975.
12. 井原成男: Personal space の発達の研究(2). 日心第39回大会論文集: 308, 1975.
13. 井原成男: Personal space の発達の研究(3). 日心第41回大会論文集: 830-831, 1977.
14. Ihara, N.: The development of personal space in Japanese children. J. of Child Development. Vol.14: 42-51, 1978.
15. 井原成男: Personal space (個人的空間) 研究の枠組(1) 空間の生態学・個体間距離・社会的シエマ及びその発達について. 立正大学保専紀要, No. 6: 1-13, 1980.
16. 井原成男: 児童におけるPersonal spaceの発達と性差. 長野大学紀要, Vol.2, No.1・2: 51-60, 1980.
17. 井原成男: 個体間距離の発達と性差. 教育心理学研究, Vol.29, No.3, 59-63, 1981.
18. 井原成男: パーソナル・スペース. 長野大学紀要, Vol.6, No.2: 39-50, 1984.
19. 井原成男: めいぐるみから絵本の世界へ. 季刊 絵本(すばる書房) No.10: 16-23, 1985.
20. 井原成男: 子どもの発達と絵本. 長野大学紀要, Vol.6 No.4: 23-37, 1985.
21. 井原成男: 移行対象の発達の意味. 小児の精神と神経, Vol.26, No. 1: 57-63, 1986.
22. 石上文正: 空間と身体. PMC出版, 1985.
23. 加藤秀俊: 空間の社会学. 中央公論社, 1976.
24. 加藤秀俊: 子どもの衣食住. チャイルド本社, 1984.
25. 川崎寿彦: 楽園と庭. 中央公論社, 1984.
26. 川添登: デザインとはなにか? 角川書店, 1971.
27. 小林重順: 建築心理学入門. 彰国社, 1973.
28. 小林重順: 日本人の心と色. 講談社, 1974.
29. 小林行雄: 古墳の話. 岩波書店, 1959.
30. 近藤義郎: 前方後円墳の時代. 岩波書店, 1983.
31. 森浩一: 古墳の発掘. 中央公論社, 1965.
32. 森浩一: 考古学ノート. 社会思想社, 1981.
33. ムンツァート(松野武訳): 色による性格テスト. 東京図書, 1983.
34. ノルベルク・シュルツ(加藤邦男訳): 実存・空間・建築. 鹿島出版会, 1973.
35. 齊藤忠: 墳墓. 近藤出版社, 1978.
36. センダック, M. (神宮輝夫訳): かいじゅうたちのいるところ. 富山房, 1975.
37. 渋谷昌三: なわばりの深層心理. 創拓社, 1983.
38. 相馬一郎, 佐古順彦: 環境心理学. 福村出版, 1976.
39. 多木浩二: 生きられた家. 青土社, 1984.
40. 谷川健一: 常世論. 平凡社, 1983.
41. 谷川俊太郎(編): 住む. 平凡社, 1979.
42. 戸坂潤: 空間について(戸坂潤全集1). 勁草書房, 1966.
43. 上田篤: 日本人とすまい. 岩波書店, 1974.
44. 上田篤, 榎並公雄, 高口恭行: 都市の生活空間. 日本放送出版協会, 1970.
45. 上田篤, 多田道太郎, 中岡義介(編): 空間の原型. 筑摩書房, 1983.
46. 上山春平: 城と国家. 小学館, 1981.
47. 山田初江: 居間の家族学. グロビュー社, 1984.
48. 山口昌男: 文化人類学への招待. 岩波書店, 1982.
49. 米沢慧: 住むという思想. 冬樹社, 1982.
50. 渡辺武信: 住まい方の思想, 中央公論社, 1983.